

「良い医療を、効率的に、
地域住民とともに」
私達は地域住民の健康増進のため、他の医療機関や保健福祉分野と力を併せ、地域中核病院として、当地域の医療を担うと共に、さらに高度な医療に対応できるよう努力します。

SCRUM No.54

すくらむ

発行：赤穂市民病院 〒678-0232 赤穂市中広1090番地 TEL0791-43-3222 (代) FAX0791-43-0351
編集：赤穂市民病院広報委員会

私の「思い」

看護部長 西 中 千佳子

私は、昭和26年赤穂市新田1048番地に生を受けた。

この年旧赤穂町、坂越町、高雄村が合併し、赤穂市が誕生した。そして、名称を新たに赤穂市民病院が同時に産声をあげた。(次頁 病院の沿革参照) 赤穂市を離れたのは、

看護を学んだ姫路赤十字看護専門学校(寄宿舎生活)の3年間だけ。申し子のように赤穂市民病院、そして赤穂市も見守ってきたことになる。昭和51年赤穂市民病院に就職。爾来、もくもくと精一杯、看護一筋に生きてきた。

思えば、古きよき時代であった。努力すれば努力した分、成果があった。勉強も十分してきた。苦しんだ分、成長もした。

当時、外科華やかしき時代で、がん患者の看取りが多くあった。延命治療が最優先され、もう駄目だというタイミングで家族を臨終の場と呼ぶ。ある乳がん患者の臨終の際、

小学生の子供に「お母さんの手を握ってあげて。」と言ったものの、後悔で涙があふれ、止まらなかったことを今でも思い出す。その頃から、社会も患者・家族に優しい医療へと変化しつつあった。

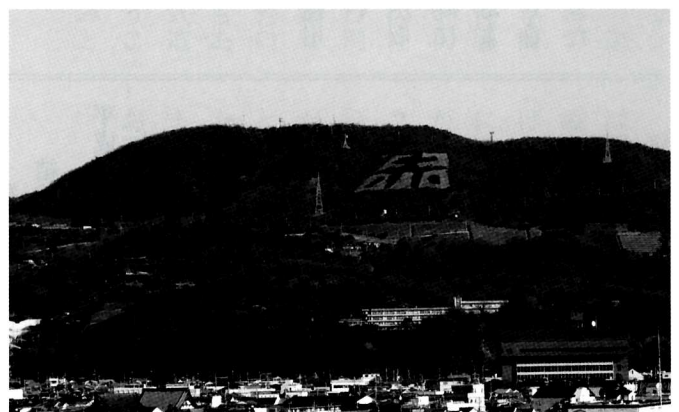
今はどうだろう。医療者が患者・家族に戸惑いを感じる時代になっている。訴訟、患者や家族からの暴言。以前に考えられないことが日常的に発生している。一方、医師と看護師の関係、上司と部下の関係はどうだろう。昔は、一定の秩序が存在していた。

ついに、還暦がわが身のころと感じ取れる年になった。頭の回転も遅い、フットワークもとろい。それは十分に身にしみている。しかし、今の40代、50代の皆の頑張り、長く赤穂市民病院を支えてきた、いや今も活躍していると思っっている。「老兵は去れ」という誹りは悲しい。さて、看護師の確保・定着

を目指して様々取り組んできた。長年の課題とされてきたものばかり、一朝、一夕で成るものではない。十分承知しているが、挑戦を続けるしかない。

藤井副院長が、「すくらむ」NO53で意見を述べられた。看護師等コメディカルの業務が計画的かつ効率的に行われるようになることを理由として、「医師は、指示出しを午前9時まで。」と。副

院長の呼びかけをぜひ実現させてほしい。一人で何役もこなす看護師。病院では看護師、家庭では妻、母、嫁。身も心も休まる暇がない。看護師の心の叫びである。もちろん医師の激務も承知してはいる。それでもの願いである。疲れ果て、辞めていく看護師を一人でも出さないように。副院長の提言が実現されますように。それが積年の私の「思い」。最後に、若き日(20代)のエピソードを紹介することにしよう。職場改善を上司



病院屋上から高山を望む

に断固申し入れたことがあった。この造反の首謀者の一人であった私は、院長室に呼ばれ、こっぴどく叱られた。皆に持ち上げられて突っ走ったが、最後には誰も付いてきけなかった。若気のいたりだったのだろうか。

院是は「恕」。職員一人ひとりの思いやり、患者への「恕」は当然ながら、同僚、部下や上司に対する「恕」。今、真剣に考える時ではないだろうか。それが私の「思い」。私の「願い」。

